

A中学校における性感染症の教育に関する教員の意識調査

今井かおり 二瓶佳代 福留有梨

大阪府済生会中津病院 中8階病棟

【背景】

中学生を取り巻く背景として、日本性教育協会の青少年の性行動より、性交経験率が女子中学生4.8%であるのに対して、女子高校生23.6%と急激に上昇している。また平成29年厚生労働省の性感染症罹患率によると中学生26人（男子3人、女子23人）であり、高校生2140人（男子532人、女子1608人）と性感染症罹患率に関しても急激に上昇している現状がある。平成14年ごろをピークに性感染症罹患率は減少傾向にあるものの、依然梅毒感染者数は増加の一途を辿っている。性交渉をすることで性感染症や若年妊娠のリスクが増加するとともに、人工妊娠中絶の増加にも繋がる。そのため性感染症の正しい知識を持ち、性感染症罹患のリスクを最小限にする必要がある。

また、中学校の性教育については、文部科学省の学習指導要領において小学校高学年からの性教育の方針を打ち出しているものの、内容は各学校の教育方針に委ねられている。

これまでの研究より中学校の教員は、性教育、特に性感染症については、「どこまで踏み込んで指導すればいいかわからない」「自分がきちんとした形で性教育を受けていないため、教育ができない」という研究報告がある。

A中学校の現状は、私達助産師に性教育を依頼し、保健体育で性教育を行っている性感染症に関してはエイズのみとなっていた。また、性感染症の教育において写真やイラストなどリアリティのあるものは避け、言葉のみの指導方法にしてほしいと教員から依頼され、視覚教材の制限が加わっている。そのため、性教育を行うにあたり視覚教材がなくても理解できるのか、視覚教材の制限が加わる背景に何があるのか、どのような教育方法が効果的なのかという疑問が出てきた。

【目的】

A中学校の性教育担当教員及び養護教諭の性感染症

に対する知識の確認、中学生への性感染症に関する教育についての考えを明らかにし、中学生から正しい性感染症の知識の普及と今後の性教育の内容を充実させる。

【方法】

対象：A中学校の性教育担当教員及び養護教員5名。
分析方法：平成29年8月にインタビューを行った。録音データから逐語録を作成し、協力者の語りの中から「性感染症に関する知識・関心」「中学生への性感染症に関する教育についての考え」に着目し、得た情報をコード化して質的記述的研究を行った。

倫理的配慮：目的外使用禁止、匿名性確保などを書面口頭で説明し同意を得た。看護部の倫理委員会の承認を得た。

【結果】

教員の性感染症に対する意識に着目し「性感染症に対する知識」「性感染症の教育で必要と考えること」「性感染症の教育で困難なこと」「教員の生徒への認識」の4つのカテゴリーと14のサブカテゴリーを抽出した。(表1参照)

表1 教員の性感染症に対する知識

カテゴリー	サブカテゴリー
性感染症に対する知識	あいまいな知識をもっている 性感染症をよく知らない ネットやニュースで情報を得ている 性感染症=エイズの認識
性感染症の教育で必要と考えること	エイズの知識は必要 コンドームの使用方法の理解は必要 中学生には性感染症の知識は必要 性感染症の視覚教材は必要
性感染症の教育で困難なこと	視覚教材の提示に抵抗がある 集団指導の難しさ
教員の生徒への認識	性教育の授業でショックを受ける生徒がいる 性被害にあっている生徒がいる 生徒が幼い印象がある 性感染症に興味がない生徒もいる

カテゴリー「性感染症に対する知識」では、「梅毒が増加している状況は知っているがそれ以上は知らない」「助産師の性教育で知ったぐらい」など、曖昧な知識が明らかとなった。また、「自分の時にちゃんと教えてもらっていない」「性感染症の授業を行ったことがない」など、性感染症についてよく知らないことがわかった。さらに、ネットやニュースで情報を得ていたり、性感染症全般というよりエイズの知識が重要と考えており、不十分な知識しかないことがわかった。

カテゴリー「性感染症の教育で必要と考えること」では、性感染症の授業は必要であり、視覚教材を使用したほうがよいとの意見があった。しかし、生徒に衝撃を与える可能性があるため、視覚教材の使用については、インタビューを行った教員の半数が「A中学校の生徒には必要ない」と認識していることがわかった。

カテゴリー「教員の生徒への認識」では、「性に関する知識が少ない」「性に関心が無い」ことから「生徒に幼い印象がある」という認識を持っていることがわかった。また、「性被害にあった生徒がいる」「生徒の中には写真を見せるとショックを受ける子もいる」などの意見から、社会背景を踏まえた授業を行うことに困難感を抱いていることがわかった。

カテゴリー「性感染症の教育で困難なこと」では、「性器の写真を見てショックを受ける子がいる」「集団に関してはイラストや写真を見せたくない」などの意見があり、視覚教材の提示に抵抗があることがわかった。また、インタビューを行った教員全員より「個別性を踏まえると視覚教材は使用できない」「どのように指導していいのかわからない」などの意見が多く、性感染症の教育を行う上で困難さを感じていることがわかった。

【考察】

インタビューを通して、A中学校の教員は中学生に対して性教育は必要だと思っている（「性感染症の教育で必要と考えること」）が、A中学校の生徒の「真面目」で「性に対して奥手」であろうという「教員の生徒への認識」があった。そのため、視覚教材の使用は不必要であり、性的被害にあった学生がいるなどのことを配慮すると、どこまで教えていいのかわからないという集団指導の難しさ（「教員の生徒への認識」「性感染症の教育で困難なこと」）に直面していた。つまり、A中学校の生徒の特性を考えると、視覚教材は過度な刺激になると考えられており、これが教材の使

用制限になっていた。また、思春期の男女合同の性教育は、それぞれの学生の成長段階に差があり、集団教育の難しさがあると言える。

よって、この3つのカテゴリー「性感染症の教育で必要と考えること」「性感染症の教育で困難なこと」「教員の生徒への認識」が教育内容に関係していることがわかった。

また、助産師が性教育を実施した後は「自分たちがフォローする役目だと思っている」という教員の発言があり、性教育に関わろうという意識があることがわかった。しかし実際は、情報源がインターネットやニュースだったり曖昧な知識しかなかった。特に、インターネットは簡単に情報を入手できるが、全てが正しいわけではないので、正確な情報や知識を伝授する必要がある。

原らの研究より、性行動について相談する相手がいるかどうかによって自己肯定感の違いがあり、教員と性感染症についての話をし、生徒の意見を聞くことは男女交際の意識に良い影響を与えているとしている。このように生徒が教員に性の相談をしてきたときに、よき話し相手となれるよう、教員に対しても正しい知識を持ってもらう必要があると言える。

【結論】

教員は性感染症に対する知識が不十分であり、生徒に個人差があるため集団での授業に抵抗感・困難感を抱いていることがわかった。そのため、今後の性教育をより効果的なものにするためには、教員にも性感染症についての情報を提供し、教員と助産師が連携して正しい性感染症についての知識を生徒に対して普及していかなければならない。

【参考文献】

1. 村上道子・赤井由紀子：学校現場で助産師が行う性教育のあり方。母性衛生。第57巻2号
2. 北村邦夫：第5回男女の生活と意識に関する調査結果報告。日本性教育協会。NO7。2011
3. 厚生労働省。性感染症報告数。2017
4. 原健一ら：中学生男女の親・教員との会話と男女交際および性感染症に関する知識・意識・行動との関連。思春期学。VOL30。NO2。2012